五領（御領）地域の歴史について

——（Ｈ２７．２．２０）

上牧本澄寺住職・三好龍孝

〈　目　次　〉　[頁]

１．はじめに　—1—
２．縄文時代から弥生時代へ——地形の概念　—1—
３．三島郡の地形　—2—
４．卑弥呼のこと——沖縄からの視点と、その水軍は　—2—
５．三島鴨神社（ミシマカモジンジャ）の成立　—3—
６．御島と三島　—3—
７．溝咋神社（ミゾクイジンジャ）の思想と大坂城の滅亡　—4—
８．丹後（元来は丹波）の天橋立から　—5—
９．ふたたび卑弥呼のこと——その進路は　—5—
１０．秀吉の天王山の戦い、および幕末・明治維新　—7—
１１．鳥羽伏見の戦いと上牧　—7—
１２．松前・法華寺と正覚寺と本澄寺　—8—
１３．五領は元来は御領　—8—
１４．継体天皇ならびに藤原鎌足　—9—
１５．アテルイ・モレの首塚　—9—
１６．五領（御領）地域の秘話　—10—
１７．五領（御領）地域の村の呼び名　—11—
１８．五領（御領）地域の盛衰　—12—
１９．上牧の城と寺と町の建設　—13—
２０．上牧の敗滅と道斉浜の繁栄　—14—

１．はじめに

この論述は、平成２７（２０１５）年２月２０日に上牧本澄寺のある地元（旧・五領村地区）の高槻市立・五領公民館で行った講話資料を元に、のち若干の改訂・加筆を試みたものです。

２．縄文時代から弥生時代へ——地形の概念

1.縄文時代に、大阪平野は海（河内湾と呼ぶ）だった。北は北海道から南は沖縄の海上交流の、港（今の大阪市）の位置が上牧だった。そこに、京都府からの桂川・滋賀県からの宇治川・奈良県三重県からの木津川の三川が合流して開口し、三角州を形成した。

2.木津川が最大で、平時にその白砂が河岸に積って白潟（しらかた・枚方市）となった。

豪雨時に土砂が対岸に押し寄せ積って、島本町・高浜（上牧のすぐ川上手）となった。大洪水時には土砂は対岸に高浜を越えて広がり、上牧の神南備森となった（土砂の堆積の少ない低地は普通にヨシ原となり、堆積の多い高まった地帯は樹木の森となった）。

3. やがて土砂の堆積は広く大阪平野となり、その中央を三川の合した大河の淀川が流れたが、大阪平野が出来ても海上交流の船は、元の港の上牧の位置まで淀川を遡った。

3．三島郡の地形

1.周囲の支流も大阪平野に流れ込んだが、支流はすぐには中央の淀川に合流せず、淀川と並行して流れて下流に向かった。特に淀川右岸でこれが著しく、三島郡の地形となる。

2.淀川右岸の支流は、上流から水無瀬川（島本町・上牧）芥川（高槻市）安威川（茨木市）で、淀川本流とこれに並行に流れる三支流との間に、三つの島が出来たのである。（本流から着岸して上陸したのに、まだ支流に隔てられている、すなわち島である。）この三島の名称が意識されて成立するのは、後に述べる卑弥呼の時代のことに間違いない。

3.水無瀬川の流れは、島本町・広瀬の位置で山地から出て扇状地となり、元は淀川本流と並行して流れ、上牧の細長い形の内ケ池がその旧河流で、前島の位置で淀川と合流していた。大雨時の洪水被害を防ぎ、必要時には灌漑用水を田畑に流すため、山崎の位置で淀川本流に直結された。それは奈良時代のことで、この治水事業で出来た荘園の田畑が当時建立の奈良・東大寺の所有になり、その地は今も島本町・東大寺と呼ぶ。河流が消えた場所は水無瀬と呼び、川の名も水無瀬川に変わった。地上の流れが消えても地下水は残り、今も水無瀬神宮には名水がある。水無瀬の下手の上牧に牛池という池があったのは、水が湧く池底がスリ鉢形の池で、農耕の牛を池で洗う時に牛が足を滑らせて溺れるから気を付けよ（子供も泳ぐな）という名です。その湧水で、上牧の内ケ池とそれより下の、旧水無瀬川の河流が後世まで存続したのです。

4.芥川の流れの、下流で淀川本流と並行した所は、古来に玉川の里として名勝地です。

5.安威川は、淀川本流と並行して流れたまま、淀川には流れ込まずに西流して、（丹波に隣接する山間地の能勢地区からの）猪名川と合流して神崎川となり、尼崎で直接に大阪湾に注いでいます。平安時代に江口の地から運河を堀って淀川から安威川・神崎川へ繋げ、京都から淀川を下って江口から尼崎へと、直接に大阪湾・瀬戸内海へ向かえるようになりました。並行している安威川と淀川本流に挟まれた地域が摂津市で、相川と呼び、阪急電車京都線は安威川と江口からの運河の合流地点で続けて（相川駅の前後で）同じような鉄橋を二回渡る形になっています。

4．卑弥呼のこと――沖縄からの視点と、その水軍は

1.さて有名な論争の、邪馬台国が畿内説であるとすれば、奈良県桜井市（纒向・まきむく）にある箸墓古墳の埋葬者の倭迹迹日百襲媛（ヤマトトトヒモモソヒメ・第７代孝霊天皇の皇女で母は淡路島出身）が卑弥呼であろうとされています。中国の史書の魏志倭

人伝の語る三世紀初めの卑弥呼による国の統一が、歴史的事実としての統一国家日本の成立とすれば、日本の神話の古事記の語る神武天皇の九州宮崎県高千穂からの近畿への東遷は、実は卑弥呼の歴史的事実を神武天皇の名に取り換えて神話で語り伝えたものと考えられます。(この見解は、沖縄の名護博氏「邪馬台国総合説・赤椀の世直し」ゆい出版・２００１年刊によります。沖縄から日本を北上する黒潮の流れの上に海上交流があり、卑弥呼の思想のシンボルは沖縄産の太陽を産む貝・ゴホウラ貝の腕輪で、初期の巨大古墳の副葬品であるその腕輪の形が、あの特異な前方後円墳の原形だと明かしています。)(また私の沖縄の友人の海勢頭豊(ウミセドユタカ)氏「卑弥呼コード・竜宮神黙示録」藤原書店・２０１３年刊の説では、紀元前８世紀末に滅亡した北朝ユダヤ支族の末裔がシルクロードを開拓しつつ沖縄および丹波地方に渡来し、その影響で日本国家の原型が生まれた。草食性の海獣・ジュゴンの姿に由来する竜宮神の勾玉(マガタマ)の形の三ツ巴紋(ミツトモエ紋)をシンボルに卑弥呼が国を統一したが、紀元前６世紀初めに滅亡した南朝ユダヤ支族の末裔が追って渡来して国を横取りした。今、沖縄米軍基地建設問題の辺野古の海に出現しているジュゴンは、卑弥呼が信仰した竜宮神の使いで、卑弥呼が建国した日本の平和思想の原点の消滅を憂えて出現したのです。)

2.さてそう考えれば、卑弥呼(神武)は鵜戸神宮(神武の父・ウガヤフキアエズノミコトの出生地)あるいは高千穂あたりを出発し、古事記では瀬戸内海を通り、岡山辺りを越えるのに３年かかり、近畿に到達した。海を来た卑弥呼(神武)の勢力を船で運んだ者は、愛媛の来島海峡にある大三島を根拠地とする水軍でしょう。大三島には日本総鎮守を称する大山祇神社(オオヤマツミジンジャ・大山積神を祭神とする)があります。

５．三島鴨神社(ミシマカモジンジャ)の成立

1.この卑弥呼(神武)の水軍の畿内での着岸地点が高槻市三島江と考えられるのは、この地に先にあっただろう鴨神社(事代主神(コトシロヌシジン・えびす神)を祭神とする)を合した、三島鴨神社(ミシマカモジンジャ・大山積神および事代主神(えびす神)を祭神とする)という独自の神社が、この高槻市・三島江の地に存在しているからです。

2.事代主神(えびす神・出雲の大国主命の国譲りに賛成した息子)を祭神とする鴨族の集団(京都の上賀茂・下賀茂神社の集団とも同族)と大山積神を祭神とする日本総鎮守を称する大山祇神社の集団との間に、この三島の地で同盟関係が成立したのです。

６．御島と三島

1.水軍の大山積神を祀る瀬戸内海・来島海峡の根拠地の島は、元は大御島であったに違いない。なぜなら瀬戸内海は多島の海で三の数字でないからです。淀川右岸の三支流か

らなる大阪三島の地に来て、役割を果たす新たな根拠地を得（鴨族の集団と同盟関係になり）、御島は三島となった。そして来島海峡の元の根拠地も大三島と名乗りを変え、神使も元の（鳥の）シラサギに淀川の（海から川に登る魚の）ウナギが加わった。

2.大山積神（オオヤマツミジン）は淀川を逆上って上陸して山に登って、大山咋神（オオヤマクイジン）になって京都市・松尾大社となり、比叡山・日吉大社（山王）の東宮の小比叡大明神（オビエイダイミョウジン）となっている。

3.また海の方では、事代主神（えびす神）も豊漁の海の神であるから、両祭神の同盟関係は海の水軍力を強化したことになる。即ちこの水軍はさらに東進して、関東への入口の伊豆半島の付根に到り、そこの静岡県・三島市にまた三島大社（大山積神と事代主神（えびす神）を祭神とする）があるのは、ここ大阪三島の地からの発展なのです。

7．溝咋神社（ミゾクイジンジャ）の思想と大坂城の滅亡

1.さて三島鴨神社の、すぐ近くの安威川畔には古事記に出てくる豪族・三島溝咋（ミシマミゾクイ）の溝咋神社があり、その娘・玉櫛媛（タマグシヒメ）は出雲系の事代主神（えびす神）（一説には、その父の大国主神）の妃としてその孫娘を生んでいたが、その三島溝咋（ミシマミゾクイ）の孫娘こそがホトタタライススキヒメ（女性の胎内のタタラ・溶鉱炉で鉄製武器を鋳（イ）直して楽器・鈴（スズ）や農具・鋤（スキ）に変える姫）と名乗り、天照系の初代神武天皇の皇后になります。これはこの地元の豪族・三島溝咋（ミシマミゾクイ）が、この地に着岸した卑弥呼（神武）の勢力に合流したことを意味します。そして溝咋（ミゾクイ）とは、弥生時代環濠集落の防衛線の堀としての溝を、咋（ク）らい食い尽し廃止してしまった豪傑の心の話を伝えています。これは卑弥呼（神武）の絶対平和思想の本質を示すものです。

2.この溝咋神社から少し陸側に、豊臣秀頼・淀君の大阪城の家老職であった片桐且元の居城・茨木城がありました。片桐且元は、大阪城の堀を埋めることで徳川家康に恭順を示して豊臣家を存続させようとしましたが、淀君の不信を買い排除されました。堀をどうするかは、この溝咋（ミゾクイ）の話です。上牧城の牧家の分家・富松家はこの茨木城・片桐且元のそのまた家老職にあり、和平策に尽力していました。上牧城の牧家の本家は、大阪城内に居住して秀頼に仕え、籠城の主戦派でした。出雲・松江城の堀尾吉晴の家老職の牧家の分家は、徳川幕府から堀を埋める工事の総奉行職を命じられて勤務に励みました。徳川家康はこのように現場で身内同士を対立させて、漠然とした安心感の内に謀略を進めていました。最後、大阪城を攻め滅ぼす時、第二代将軍徳川秀忠の馬印として、戦国時代を生き抜き勝ち抜いた細川家に、「銀半穿の旗指し物」を召し上げるべく、差し出しを命じました。名誉なことにそれは、細川家中の重臣・上牧の牧家の分家の所持品でした。徳川後継者の秀忠は、その旗指し物を掲げて大阪の陣に大阪城を滅ぼし、召し上げられた牧家の分家は九州・豊前から馳せ参じて、大阪の陣の戦場で忠義に励んだと伝えられています。

3.「饅頭が怖い」という落語があります。「堀（が無いの）が怖い」という者同士を対立させたように、「饅頭」が気になって気になって怖い……、という者を、皿に山盛りに饅頭を積んだ部屋に閉じ込めて、意地悪く楽しもうと言うのです。そしたら窮地に立たされたその人は、饅頭の全部を咋らい食べ平らげて、「ああおいしかった」という話です。溝咋（ミゾクイ）の思想はこの落語の主人公に生きています。

8．丹後（元来は丹波）の天橋立から

1.丹波という地域の名は、京都府中北部から兵庫県中北部の広い範囲を指す。日本海側から瀬戸内海・太平洋側に越えるのに、より西方の中国山地の高地でなく、川を遡って低い峠を越えて川を下れば山越えが出来るのがこの「丹波」の特徴です。その広範な地域の古代からの中心地は、元伊勢（モトイセ）を名乗る籠神社（コノジンジャ）のある天橋立（アマノハシダテ）です（今は丹後とよばれる）。その股覗きの寺が、冬の食糧欠乏時に観音菩薩の臀部を鹿のモモ肉として食べて命をなりあう成相寺（ナリアイデラ）という。安満（アマ）・成合（ナリアイ）という地名が高槻市に一体で存在するのは、天（アマ）の集団が山越えで淀川水系の拠点に移動したのです。そのまた瀬戸内海への出口が尼崎（アマガサキ）です。（この集団が奈良に最初の丹波王朝と呼ばれるものを建て、卑弥呼の父の第７代孝霊天皇までの前史がそれに想定されます。この集団の源流が、遠くシルクロードを来た北朝ユダヤ支族にあるというのです。）

2. 安満（アマ）・成合（ナリアイ）地域の川は「ヒノカワ」と地元で呼んで来ました。「檜尾川（ヒオガワ）」という表記は誤りと思われます。出雲の八岐大蛇（ヤマタノオロチ）の川が古事記では「肥の川（ヒノカワ）」で、成合の春日神社には龍神の雨乞い神事があり、山上には名刹の金龍寺があったし、雨乞い祈願成就で知られる平安時代の千観法師がゆかりの寺でした。肥沃な農耕地を思わせ、古代のこの地の指導者の古墳（安満宮山古墳）から卑弥呼の鏡が（魏からもらった百枚の内の）３枚も出土しているのです。なお出雲の影響が播州経由でも考えられるのは、高槻市中心部の野見神社の明治以降の名乗り（出雲系の野見宿禰に由来）などに見られます。

3.天橋立からも遠くない、丹波の鬼の伝説のある大江山の主の、有名な酒呑童子のその第一の弟子は「茨木童子」です。三島郡の茨木市の地から、追い立てられて逃れた先が、丹波の大江山まで行くのです。実際に地域が直結しているがゆえの物語りです。

9．ふたたび卑弥呼のこと――その進路は

1.海路（主力は瀬戸内海）で各地の津の勢力を配下に摂（おさ）めて（ゆえに摂津と呼ぶ）三島に着岸した卑弥呼（神武）の勢力は、最初に（淀川対岸の河内の）東大阪市の日下（クサカ）の楯津（タテズ）に上陸するが、兄の五瀬命（イツセノミコト）が手を矢で負傷し（のち和歌山で死にいたる）、遠く紀伊半島の熊野からの進路に変更する。今も高槻市成合に「日下」の名につながる住民の方々があり、この名は元来は丹波北

部に由来し、一筋の経路が見えます。また神戸市の諏訪山・茨木市北部の諏訪神社・高槻市川久保（ポンポン山の直下）の諏訪神社と、古事記で国譲りに反対した諏訪大神（スワダイジン・出雲の大国主命の一方の息子）の西国街道山際の配置が見え、卑弥呼（神武）勢力に対峙したことが伺われます。

2.水運の大動脈の木津川沿いに、（古事記の語る南の熊野からの主勢力とは別に、北から別働隊として）卑弥呼（神武）の勢力が奈良（纏向）に向けて進んで行く時、西日本の全勢力を摂津の国に結集した卑弥呼（神武）が、山城の国・京都盆地に入ろうとして、諏訪大神を中心とする１００余国の神々が集結した大勢力と最初に向き合ったのが、上牧本澄寺のある神南備森（カンナビノモリ）です。上牧（カンマキ）とは本来が神牧であるから「カン」と発音するのです。神々が陣を敷いた牧野です。（大阪から大和川沿いに進む地にも奈良の上牧がある。）この対陣をどうするか。

3.「（神武）」とは「戈を止める（武）神の威力」を指す。いかに説得で武力を回避するかということです。高槻市成合から金龍寺のある山上に上がり、稜線沿いを上牧・神南備森の背後に下る中腹の位置に若山神社（ワカヤマジンジャ・スサノオノミコトが祭神）があり、その下の地名が桜井です。桜散る井戸で身を清めて決心をして、和平説得の使者に出向いたのでしょう。（ついでに、のちの室町時代の南朝方の忠臣・楠正成の子別れの場はこの地・島本町の桜井です。）淀川対岸の枚方市・牧野の交野神社（カタノジンジャ）がまた第一の祭神をスサノオノミコトとしているのは、対岸からも包囲の拠点を固めたもので、この交野神社は北河内で一の宮を称しています。スサノオノミコトは、卑弥呼がそのまま該当する天照大神の弟神で、最初は乱暴者だったがのちに天照大神に協力するのです。高槻市・茨木市・摂津市・吹田市から兵庫県の川西市・宝塚市まで、スサノオノミコトの神社が多いのは、摂津国全域が卑弥呼に協力していたことを意味しているでしょう。

4.この巨大な勢力同士の対陣（卑弥呼と諏訪大神）に和平説得が成功しなければなりません。スサノオノミコトの包囲網を成就させて、この最初の説得経験を成功に導いたのは、安満・成合の「肥の川」地域の指導者が、山の稜線の道へとスサノオノミコトを案内したことであったと思われます。その功績の大きさから、卑弥呼がこの小さな地域の指導者に、魏からの鏡を３枚も贈ったのでしょう。この対陣を越えて京都盆地に入り、次に木津川沿いに奈良盆地へ入る位置には、高速道・田辺西インターの近くに、次の神南備山（カンナビヤマ）があり、ここでも同様の対陣があったのでしょう。

5.「神南備（カンナビ）」とは、諏訪大神の１００余国側の神々が陣地を構えた場所のことでしょう。そして卑弥呼の最終目的地の纏向の、大神神社（オオミワジンジャ）は三輪山そのものが御神体で、また神南備山です。卑弥呼の主勢力が南の熊野から吉野を経て纏向に入ったのは、反対勢力によるゲリラ戦を回避するための策で、北から吉野へ追えば室町時代の南北朝でのように、長期的混乱になります。また卑弥呼の主勢力を最後に導いたとされる三本脚のヤタガラスは、北の京都盆地の賀茂族集団であり、

高槻市・三島江の三島鴨神社から繋がって、北からの別働隊の進出を暗示しています。

１０．秀吉の天王山の戦い、および幕末・明治維新

1.ずっと後の時代、成合・金龍寺からの同じ稜線を豊臣秀吉の軍勢が通ったので、この道は「太閤道」というハイキングコースになっています。秀吉勢が楽に天王山まで進んだのは地元・上牧の侍の案内と思われ、明智光秀の軍勢はまだ京都盆地の内側にいたから、秀吉が勝ったのが天王山の戦いです。京都を守備するには、明智勢は上牧・神南備森の位置まで出て陣を敷かねばならなかったはずです。上牧の侍（牧家の一門）が秀吉側の武将の堀尾吉晴や片桐且元の家老職にあって、明智はこの地にまで進出できなかったのです。（明智は娘・ガラシャの嫁ぎ先の細川藤孝を味方と期待し、牧家の一門が重臣にいたが、細川も秀吉側に付いた。）

2. さらに幕末・明治維新には最初は、長州藩はわずかな軍勢で京都御所にまで突入しました（禁門の変）。この時点ではまだ薩摩藩が幕府に味方していたので、長州藩は敗退しましたが、京都の町は大火で焼けたのです。急遽に京都守備のため、幕府が関門（巨大な大砲を備えた城）を構えたのが、上牧・神南備森の位置です。幕府の勝海舟などが城の設計に関与していたはずで、北海道・函館の五稜郭と同じ設計でした。五稜郭は周囲に向けた星の先端に５カ所の大砲があるが、ここは西国街道を来る長州勢に星の先端１カ所の巨大な大砲を向けていました。この関門の城に三重県・津の藤堂藩が配備された。

3.幕末最後の段階で長州の軍勢が、この上牧・神南備森の目前の梶原村まで迫り、藤堂藩は大砲を構えて、射撃命令の出る寸前であったが、京都の政治情勢が（大政奉還からさらに）幕府主導の王政復古に決し、幕府は長州の軍勢に砲発することなく、この地での開戦は回避されました。地元の住民はもちろん開戦を絶対に望んでいないし、本澄寺は戦争回避のために働いていたと思います。寺はそのために存在しているのです。

１１．鳥羽伏見の戦いと上牧

1.王政復古により、幕府方は大阪へ引き揚げ、替わって薩摩・長州勢が京都に入ったが、今度は幕府方（会津勢など）が逆に京都に攻め上ったのが鳥羽伏見の戦いです。慶応３年末の１２月２２日に、会津幕兵方は藤堂藩の案内で上牧（おそらくは、当時に上牧村内に末寺・塔頭８カ寺を持っていた本澄寺を中心）に宿陣し、正月２日夜に京都に向けて出陣し、３日の昼に鳥羽伏見で戦争となりました（藤堂藩の勤務記録による）。

2.幕府方は京都で敗れて、八幡・橋本の男山周辺に再度に陣を敷いたが、上牧・神南備森の関門にいた藤堂藩が、公卿・四条隆平の工作により寝返り、移動式の大砲を島本町・高浜の堤防上に移動して、対岸の幕府軍を砲撃しました。昨日まで幕府方であった藤堂藩からの想定外の川越しの砲撃の大音響は、心理的・政治的効果が絶大であったと思われます。この地の動静が歴史の流れに大きく影響しました。

3.しかし本澄寺の地元の上牧には、会津幕兵方が１２日間も宿陣してここから出陣したことは、一切何も伝承されていません。（考えられることは、先に「溝咋神社」のところで述べたように、実は上牧は４００年前に大坂城の豊臣方が滅びる時、豊臣方の拠点として一緒に滅ぼされた地です。大阪城の天守閣を取壊して豊臣の名残りを全て消し、豊臣の家老職（片桐且元）の茨木城を廃城にし、そのまた家老職（牧家の分家の富松家）に繋がる上牧城（城垣内・ジョノカイトの小字名を今も残す）も廃城取壊しにされたに違いありません。その時の上牧の指導者の牧家の本家は、大坂城内で父子討死に家の記録皆焼失、と伝えられています（細川家重臣の牧家の分家の系図記録による）。ここには反徳川幕府の下地がずっとあったように思えます。会津幕兵方を歓迎しなかったはずです。戦争で殺戮された者の恨みは何百年も続くのです。

4.鳥羽伏見で勝利して江戸に進軍した新政府軍に、江戸城は無血開城され、そののちは不幸にも北海道まで戊辰戦争が続きます。江戸は江戸府となり、初代江戸府知事（東京都知事）には（上牧に領地を持ち続けた）烏丸家の当主の烏丸光徳卿が就任しています。新政府軍の中枢部に参加していたと推定され、領地の上牧・神南備森の藤堂藩や宿陣した会津幕兵方に関する情報は、裏で烏丸家を通じて（平和のために）新政府方に流れていたと思われます。初代江戸府知事への就任は、その情報源の功績も一因でしょう。

１２．松前・法華寺と正覚寺と本澄寺

1.上牧・神南備森の関門（幕府の城）の山側に隣接して、本澄寺と同じ日蓮宗の大聖山・正覚寺（ダイショヤマ・ショウガクジ）という寺がありました。この辺りの日蓮宗発祥の石塔の建っていた地（石塔は今は本澄寺にある）なので、日蓮大聖人の大聖山と言います。本澄寺にある日蓮大聖人４３歳御自作の御霊像（福井県の若狭・妙行寺から来た）に対抗する御霊像（京都に日蓮宗を最初に布教した日像上人・大覚大僧正が、後醍醐天皇の建武中興の直前に祈願造立のもの）が安置されていました。この寺が江戸時代中期に出現したのは、本澄寺のある元・豊臣方の地を監視する徳川幕府隠密の寺だからでしょう。それで幕府はこの地に即座に（必要とあらば）関門の城を出現させ得たのです。

2.正覚寺は倒幕されて消え、御霊像は明治１９年に戊辰戦争最後の地の北海道・松前の法華寺に移動安置されました。戦乱の被災への励ましです。本澄寺・正覚寺・松前法華寺は、いずれも京都の日蓮宗の本山・本満寺（当初の由緒は公家・近衛家の寺）の末寺でした。

3.また、本澄寺と正覚寺は対立しているように見えますが、正覚寺の開山・日恵上人は、小笠原家臣・豊前国牧氏の出身と石碑に記され、上牧の牧一門の分家なのです。

１３．五領は元来は御領

1.われわれのこの地域は今は「五領」と称していますが、日本の国が最初に統一される卑

弥呼の時にも決定的に大事な地でありましたし、戦国時代の秀吉・明智の時にもそれは同様のエピソードとして繰り返され、幕末・明治維新にも重要な戦略地点でした。

2.大事な地であるから、単独の支配者がこの地を独占すると、その動きにより国家全体を危うくしかねない。それで、この地より京都に向けての地域は幾つもの領地に細分化されています。

3.五つの領地、高槻永井藩・淀永井藩・旗本鈴木家・烏丸本家・烏丸別家というように細分化されて、もっともらしく「五領」とされています。しかしこれでは、地域の誇りも何もないのです。権力中枢の支配者にとって好都合なだけです。本当はここを三島郡の中で最初の領地とした公家の藤原一門が、大事な地であることを忘れぬように、住民もその誇りの自覚をもつように、平和のために自らが何をすべきかを常に考えるように、「御領」と呼びならわしたのが元来の名称の始まりなのです。そこを守り続けた烏丸家は、一時期最初の江戸府知事となったのです。

１４．継体天皇ならびに藤原鎌足

1.卑弥呼の箸墓古墳（太陽を産むゴホウラ貝の腕輪の形）を発祥とする前方後円墳の最大の古墳である仁徳天皇陵、その主の仁徳天皇の弟の４代の子孫を名乗り、福井県・越前の地から来て、上牧・神南備森の淀川の対岸の地にある楠葉（クズハ）の交野天神社（カタノテンジンジャ・当時は貴船神社か、の地）で即位式を挙げたのが、第２６代継体天皇（ケイタイテンノウ）です。（交野天神社は、後に第５０代桓武天皇がこの地に来て立って、京都盆地の長岡京の位置に遷都を決めたという神社なのです。上牧・神南備森と一対で、北陸ルートに対しても扇の要の位置になります。）

2.継体天皇は奈良盆地の都に入るまでに約２０年もかかり、その子の欽明天皇の時には日本に仏教が伝来し、仏教信仰で有名な聖徳太子はまた曾孫に当り、系統として仏教に縁がある天皇です。墓を高槻市の西部に位置する今城塚としたのは、即位をした河内の楠葉とその対岸に位置する三島の一帯を、大事な地域と認識していたからでしょう。

3.その次の時代になると、公家の筆頭・藤原氏一門の初代・藤原鎌足（フジワラカマタリ）の墓とされる遺跡が、高槻市の阿武山にあるのは有名です（茨木市との境界で、継体天皇陵今城塚にも近い）。藤原氏が三島地域一帯を大事な地域と認識していたからで、高槻市・茨木市には藤原氏の氏神の神社である春日神社が多く存在しています。その中で、上牧の春日神社（上牧・旧鵜殿・井尻の三カ村が氏子）が一の宮を称しています。藤原氏はここ上牧の地から入ってその勢力を広げていったからでしょう。だから「御領」なのです。

１５．アテルイ・モレの首塚

1.先のスサノオノミコトが拠点にした淀川対岸の牧野・交野神社の隣地（旧境内）に、蝦夷の大将・副将のアテルイ・モレの首塚があります。初代の征夷大将軍の坂上田村麻

呂が戦いに和平をして連れ帰り、アテルイ・モレはここに滞在していましたが、朝廷が命じて処刑したのです。この地に居たのは、東北蝦夷地の多くの人達がまたこの近辺に来ていたからでしょう。（これを悼んだ坂上田村麻呂がアテルイ・モレの供養のために建てた寺が京都の清水寺で、その追悼の意味が現在も生きているから、清水寺の貫主が毎年末に「今年の字」をマスコミの前で揮毫しています。）

2.幕末明治維新にこの地では回避された戦乱が、東北・北海道では戊辰戦争となったのは悲しむべきことです。

3.淀川対岸の河内国の枚方市・交野市・寝屋川市は渡来系の人達が集まって来ていた地です。寝屋（ネヤ）とは「寝殿・迎賓館」の意味です。「ネヤ」は沖縄語の「ニライ・カナイ、ネリヤ・カナヤ」に繋がり、「はるか遠くからやって来て、ネヤに泊まっている人は、カナ（神）のように尊い人だ」という日本人の客人を大事にする心を表現しています。この地には天野川という奈良盆地から直接に流れ出る川があり、この川を辿れば山越えをせずに古代の都・奈良の地に入れます（大和川と木津川の二大河は別として）。渡来人は許可が出るまで、あるいは長期にこの地に滞在したのでしょう。

4.出雲からも丹波からも越前の北からも南からも、遠く渡来人たちは海を渡って北極星を目印に天体観測しながらやって来た。だから都へ最後に導く川も「天の川」と呼ぶ。

5.そしてこれらの渡来人が淀川を対岸の摂津国に渡った地が、高槻市・唐崎（「唐・カラ」は外国の意味）と呼ばれたのです。

6.対岸の河内国も合わせて、遠近の各所からの交流の道が集まってくる地点が、上牧・神南備森であり御領という地域なのです。

１６．五領（御領）地域の秘話

1.明治初年の地形図に、上牧の大きな内ケ池のまだ下もに、淀川本流の水路幅の三分の二ほどもある、淀川本流と繋がった大きな大きな細長い池があります。その池と淀川本流に囲まれた場所が旧鵜殿村です。鵜殿（ウドノ）の名は、紀伊半島の熊野川河口の新宮市の対岸の地名です。いわゆる熊野水軍の鵜殿を名乗る集団が、紀伊山地の木材で船をつくり、太平洋から紀伊水道を通り大阪湾から淀川をさか上り、この五領へ来ていたのです。「鵜」の名前は、神武天皇の父のウガヤフキアエズノミコトの宮崎県「鵜戸神宮」があり、熊野の「鵜殿」、そしてこの五領の「鵜殿」、また奈良東大寺二月堂のお水取り行事に水を送る若狭・神宮寺の「鵜の瀬」があり、北へ行くと山形県・羽黒山の「湯殿」が「鵜殿」ではないかと思われます。

2.古事記の第１０代崇神天皇（スジンテンノウ）の「タケハニヤスの乱」のところで、「久須婆の度（クスバノワタシ・上牧の対岸の楠葉の渡し）に到りし時、皆な迫めたしなめらえて、（恐怖から）屎（クソ）出でて褌（ハカマ）にかかりき。ゆえに、其地（ソコ）を号（ナズ）けて屎褌（クソバカマ）と謂う。今は久須婆（クスバ・楠葉）と謂う。」「其の逃ぐる軍を遮りて斬れば、鵜の如く河に浮きき。ゆえに、其の河を号（ナ

ズ）けて鵜河と謂うなり。」とあります。楠葉の渡しを上牧に渡り切れなかった者たちは、殺戮されて鵜の死骸のように流れていった。そして河は「鵜河・ウカワ」と呼ぶのが淀川の元の名前であると。

3.崇神天皇はミマキイリヒコとも呼ばれ、私の沖縄の友人の海勢頭豊氏の説では、「ミマキ」が朝鮮南部の任那（ミマナ）を経由したことを意味し、「イリ」は外来で入ることを意味する。即ち、日本にやって来た南朝ユダヤ支族の末裔だと言う。

4.五領の大きな大きな細長い池を川の港に使って、淀川水系中流の水運の基地とし、奈良盆地の卑弥呼（またはそれ以前）の都にも物資を運び、あるいは陸路に積み替えて丹波方面へ日本海方面へ放射状に物資を運び、その水運を「鵜」の集団が取り仕切っていたから、淀川は「鵜河」と呼ばれていた。その集団が一時滅ぼされたのである。これは、卑弥呼（神武）の時代のすぐ後のことと思われます。

5.この楠葉・上牧の渡しでは、のち幾つもの政変の機会に、奈良盆地の都から逃げて来て、渡り切れなかった者は命を落とした。渡り切った者は、万感の思いで上牧・鵜殿のヨシ原の中を、遠く六甲山の山並みの向こうの播州・但馬の別世界へと急いだのです。この命がけで通り過ぎた地の、そのヨシを吹き口に、篳篥（ヒチリキ）の笛で心の思いを演奏するのは自然なことに思われます。伝統として、上牧のヨシが吹き口用に朝廷（宮内庁）と伊勢神宮に献上されています（俗に言う、鵜殿のヨシ、は本来はスダレ用が主です）。

6.西に向かう道は、第一には水運の道、第二には山際の西国街道の道、第三には山中を行く抜け道です。この第一の水運の道の楠葉・上牧の渡しから、斜めに山際の第二の道に、やがて安威川沿いから豊能町・切畑（キリハタ）を経て能勢妙見山の第三の道へ至る経路は、のちの隠れキリシタンの道にもなり、この線上の茨木市の山中の民家から（よく教科書に出ている）フランシスコ・ザビエルの画像が発見されています。落ち延びる者の道でもあるでしょう。

7.この落ち延びる者の道は、実は生活の道でもあります。現在の本澄寺の本堂（天保１１年・１８４０年建立）の建築木材は全て豊能町・切畑から、この道を運ばれたものであり、祭礼行事には今も切畑から参加をされています。

１７．五領（御領）地域の村の呼び名

1.川の港に入るには、特に増水時に、上流から急旋回に梶（舵・カジ）を切って港に入る操船技術は、注意を要したことでしょう。しかし港に入れば安全地帯であった。梶に注意して入った港の前に平原が広がっていて、そこに出来た山際の村を「梶原（カジワラ）」という。「梶を折らぬように」との戒めからその地の寺は「梶折」一乗寺とも（江戸時代になお）名乗っています。

2.「鵜殿（ウドノ）」村は「鵜」の集団という非常に古い由来の人々が住んだところです。この地は三島郡地域の中でおそらく最初に開けた発祥の港であり、飛鳥時代になお栄

え続けていた証拠には、この辺り最古の寺院である梶原寺が目の前の梶原の地に建てられていたわけで、それはこの港が非常に立派に栄えていたことを意味するでしょう。

3.川の港の、すぐ岸は、水路（井路・イジ）の奥まった尻にあたるところから、その村を「井尻（イジリ）」という。この井尻村の田んぼの中に、「春日大明神」の神社がぽつりとひとつ森になっているのは、遠路を着岸した航海者たちが無事の到着を感謝して参拝する港の神社であったはずで、古い時代には春日大明神以外が祭神であったと思われます。上牧の春日神社の方が、古い時代にはこの神社の奥社に当ったのではないでしょうか。

4.ヨシ原の部分は外島（ソトジマ）とよぶ。「上牧（カンマキ）」に隣接の大きな細長い池は内ケ池（ウチガイケ）というから、上牧村のある場所自体が実は内島（ウチジマ）なのである。

5.それで、前（目の前の、下流の）の島にある村を「前島（マエジマ）」という。

6.神を「コウ」という読み方をする「神内（コウナイ）」村は、神南備森の対陣の時に、桜井から来た天照系のスサノオノミコトの内（ウチ）に属した地だから、１００余国の神々の「カン」でなく「コウ」と読むと思う。向日市に神足（コウタリ）があり、要するに神々（コウゴウ）しいのです。また、紀州熊野の鵜殿村の隣りが同じく神内（コウノウチ）村なのです。

7.街道沿いに、優雅な名前の「萩ノ庄（ハギノショウ」村がある。

8.「道斉（ドウサイ）」は元々が、大字・鵜殿村の一部の小字の名なのです。小字の道斉の方が大きくなり、大字の鵜殿を従えて現在は「道鵜町（ドウウチョウ）」になった。

9.なお、「ひの川」を境に東側が五領地域なのですが、「ひの川」は元は成合から南に真っ直ぐに南下していました。平安時代に、ひとつ上みの元の水無瀬川の河口の方に向けて、山沿いを流れる（不自然な）位置に（洪水被害防止と灌漑目的で）河口が付け変えられているのです。

１８．五領（御領）地域の盛衰

1.先に述べた水無瀬川の河口の山崎への付け変えで、本来の河口であった五領の川の港に水が流れなくなり、川の港がだんだんに土砂や植物で埋まって浅くなり、使用できなくなってきたと思われます。奈良時代以降のことで、平安時代に入るとその地の梶原寺がやがて無住となり、消えてゆくのは、港が廃れてしまった証拠と考えられます。

2.これに対して、付け変えで出来た山崎の人工の河口が、新たな川の港として使われて発展しました。平安時代後期の信貴山縁起絵巻に、山崎長者の話が出てきます。僧侶の托鉢の鉢に乗って山崎の倉が信貴山まで飛んでゆく。山崎の長者の財力で、奈良の信貴山の寺が維持されたと思わせる絵巻です。なお、生駒山に連なる信貴山は、聖徳太子が日本最初の毘沙門天王を祀った山であり、奈良盆地の都の鬼門の第一の防衛線です。山崎の山をまた天王山というのは、これに連なるポンポン山の中腹と麓にある高

槻市の本山寺・神峯山寺がまた毘沙門天王を祀り、奈良盆地の都と外港の大阪から見て、鬼門の第二の防衛線として、北に向けて同じ意味を持っているからです。

3.次いで、鎌倉時代に水無瀬の地に、後鳥羽上皇が水無瀬離宮を営んだのは、この辺りの地域を重視する同じ戦略的発想でしょう。しかし、承久の変で後鳥羽上皇は鎌倉幕府に敗れ、大きな発展にまでは至らなかったようで、今は水無瀬神宮となっています。

１９．上牧の城と寺と町の建設

1.そして室町時代に、廃れた川の港の再興をめざし、牛池（阪急上牧駅前にあった）の湧水により存続していた内ケ池を新たな港（停泊地）として使い、淀川から牛池まで人工の新川（シンカワ・今もそう呼ぶ）を掘ってつないで内ケ池まで舟を引き導き、既存の水路で元の川の港の出口へ送る。こうして川の港の機能を再興したと考えられます。今も新川の横の道路の歩道が非常に幅広いのは、新川沿いにあった舟を引く道が歩道の敷地になっているためです。淀川の本流も含めて、周囲を大きく堀で囲んだ中に、田んぼもあって籠城も可能な形です。内ケ池を堀に見立てた二つの城（上城垣内・下城垣内）（関与した摂津守護代・薬師寺一門の与一本家・与次分家の城）を築造し、足利義稙将軍祈願所の本澄寺を建て、町を造りつつあった。高槻市芥川の大工職人の村・清福寺とおなじ「清福寺町」という町名が上牧に存在したのは、大工職人が集団で町造りに移住していたのです。（のち、上牧の侍で堀尾吉晴の家老職・牧志摩守は、出雲の城下町・松江の設計をしたと伝え、この上牧の都市造りの延長と思われます。）

2.内ケ池の下端には、池を挟んで両側に「奥殿垣内」という部分があり、公家・烏丸家がここで通行税を取る機能を果たしていたと思われます。そのすぐよこに梶原中村（梶原から仕事のために移住した人々の、まん中の村）という地名が残り、西国街道の梶原本村に向けて真っ直ぐに道が延び、陸路へと物資を積み替えた形跡があります。奥本家・奥野家・船本家という名が上牧・梶原の双方にあり、本澄寺やその末寺との関連から、上牧から仕事で梶原に移っていった家々と思われます。

3.上牧旧村は１００軒余りの家数でしたが、ほとんど全部の家の軒先毎に（全長５～６ｍの）立派な木造船（川船）が吊るされてありました。「よく水害に遭う貧乏村だから、いつでも逃げられるように船が吊ってあるんや」と子供の頃に聞かされていましたが、よく考えると、貧乏であれば避難用の船など各家毎に持ってはいないのです。水軍にもつながる、水運の流通拠点であった名残りと思われます。

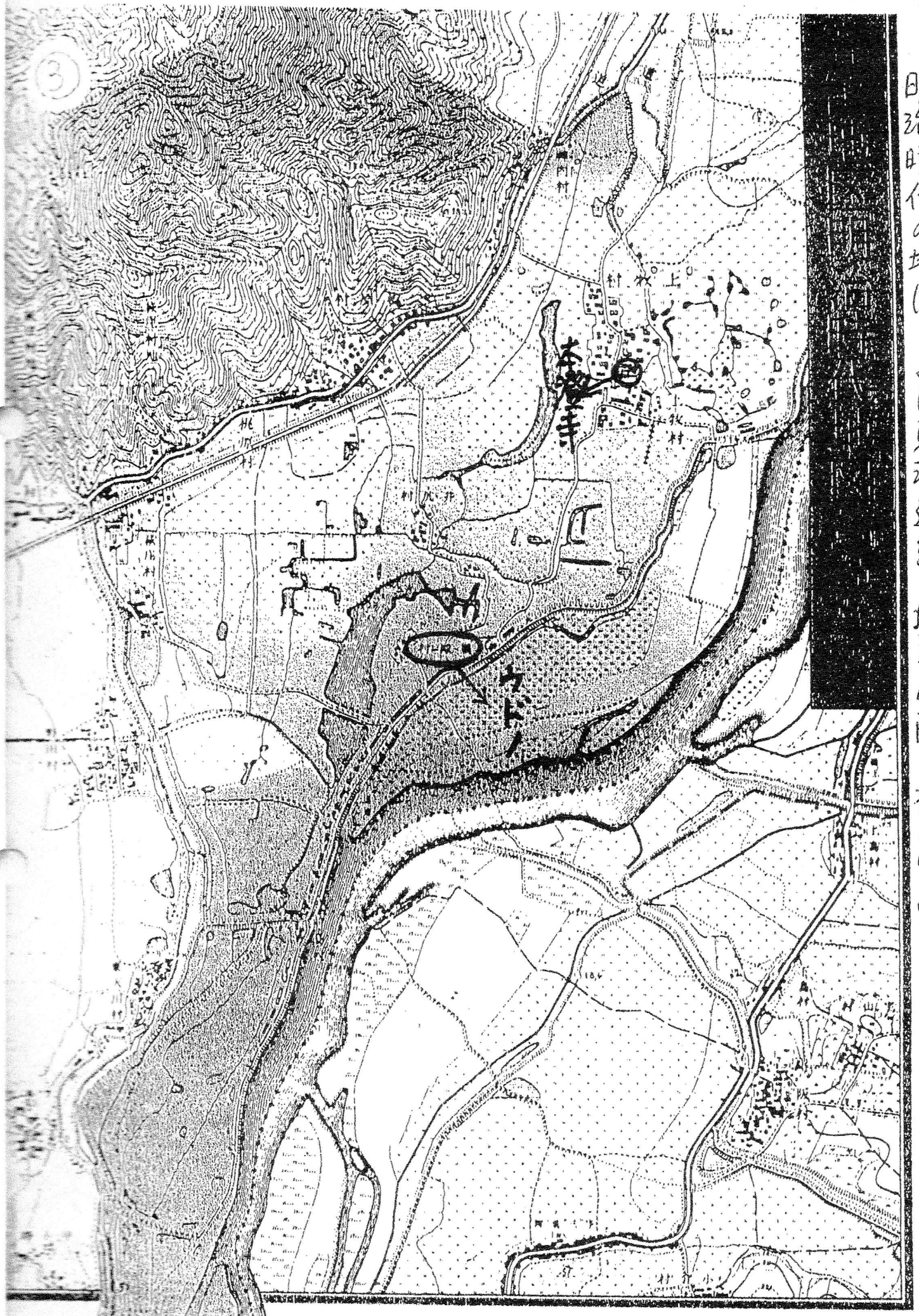
4.東上牧・淀の原にあった沢山の池の縁には、かつて柳の大木が幾本もあり、これは上牧で柳行李（やなぎごうり・物資の移送容器）を生産していた名残です。「豊岡街道」という言葉が地元にあり、丹波方面の終着地が兵庫県・但馬の豊岡であり、その豊岡では今も柳行李が作られていると聞きます。

5.「ひの川」の横の高槻市・山手町は、元は下村（しもむら）といい、上牧の流通拠点から見ての、シモに当るのです。また、山間の原村から坂道を成合村へ牛に荷車を引か

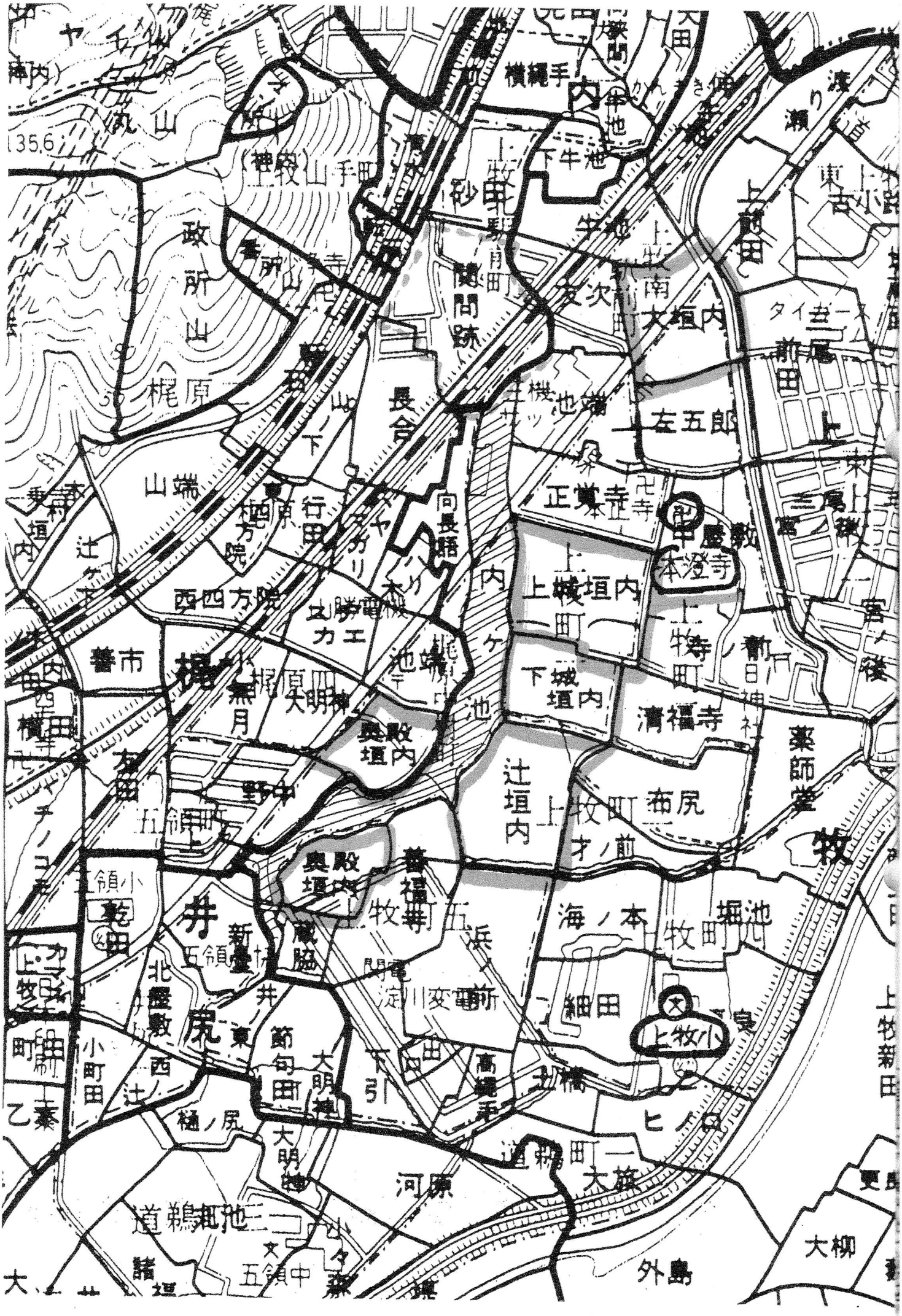
せて越えた地点を「京坂」と呼び、牛の地蔵様が祀られ、京都への入口の意味です。原村からは成合村を通るのが上牧の流通拠点への最短路で、そこから水運で京都に通じているから「京への坂」なのです。

２０．上牧の敗滅と道斉浜の繁栄

1. 上牧の流通拠点は、結局は大阪の豊臣政権と一体のもので、大阪城の滅亡と共に全ての権利をほぼ失ったはずです。元は豊臣方の武士であった住民たちの、地元で生き残ったものは皆な農民の身分となりました。豊臣時代の上牧の繁栄を語り伝えることも、徳川幕府のもとでは一切不可能なはずで、具体的に明らかな形では何も伝えられていません。徳川幕府は上牧の城も利権も全て消し去りましたが、本澄寺まで消し去る大義名分は無かったので、地域の中では不自然に大きな寺である本澄寺だけが残りました。本澄寺を中心にして上牧村が特異に日蓮宗の信仰が熱心であったのは、敗滅した自分達が道義的には何も劣るところが無いことを、信仰により確信するという背景があったと思われます。
2. そして徳川幕府は、京都と大阪の間を支配する城として、高槻城だけを残しました。高槻城への川の港は（上牧が流通拠点の時代の水路の出口に当る）道斉浜にしたのです。道斉浜からは陸路を真っ直ぐと西に行けば、春日町を経て高槻城に至るからです。
3. かつて上牧の流通拠点で働き、梶原中村に住んでいた人々は、希望すれば再雇用されたと思われます。上牧の利権だけは取り上げて、徳川幕府に従う人は通勤させたのです。やがて雇用を求める人々は今度は、鵜殿村の道斉浜へと移住し、鵜殿村の住人は梶原村などからの移住者の方が多くなったのだと思われます。梶原村からの移住者は梶原の畑山神社の氏子ですから、祭りは畑山神社の祭りに参加します。鵜殿村の旧住民は上牧の春日神社の氏子として春日神社の祭りに参加するわけですが、徳川幕府のもとでは当然に、だんだんと道斉浜の勢いが増し、やがて鵜殿村というものが消滅してゆくわけです。それは上牧の春日神社の衰退でもあり、それに応じて上牧の春日神社の御札には、日蓮宗の仏教の御本尊が（近年まで）内封されていたのも自己防衛の自然の勢いとして理解されるでしょう（今は入っていない）。
4. 本澄寺創建当時からの檀家で、応仁の乱の時期に、鎌倉時代の運慶作という一対の仁王像を本澄寺に寄進した武士のＴ家がある。神内村の家であったのだが、徳川時代にも武士を続けて高槻藩に勤務し、勤務の都合上から川沿いの道斉浜へやがて移住した。元禄年間頃には、先祖が寄進した仁王像を安置する仁王門が傷んだため、一人で仁王門を再建寄進された、本澄寺の大功労者です。しかし本澄寺の地元の上牧村ではその功績を言う人がいない。公共的な冊子に「先祖が淀川を流れてきた仁王像を、拾って寄進した」と書かれたことがある。一対の像が淀川をひと揃いで流れてきたものを拾うことなどはあり得ないし、寄進された当時のＴ家のあった神内村は淀川沿いでもないし、これは全くの嘘である。地域というものは難しいのです。　　合掌



明治時代の地図　JR東海道線の堤が山際に推かれている


横綱手
内
牛池
下牛池
渡り瀬
135.6
山手町
政所山
梶原
長合
山端
行田
西四方院
善市
梶
無月
大明神
奥殿内
野中
五領町
乾田
井
新堂
北屋敷
尻
小町田
樋ノ尻
大明神
河原
道鵜池
諸
五領中
外島
大柳
上牧
上牧小
海ノ本
堀池
細田
高橋
ヒノ
大旅
道鵜
辻垣内
布尻
薬師堂
清福寺
上牧寺町
上城垣内
下城垣内
中屋敷
本澄寺
正覚寺
左五郎
上
前田
東上
三尾
宮ノ後
南大垣内
友次
砂田
機
池端
向長路
勝電機
カエ
池端
善福寺
蔵脇
浜
新電
淀川変電
節句田
大明神
下引
出内
東
西
小町田
乙
秦
五領
小
乾田
上牧
横田
友田
五領町
上
カ
日
刷
田
町
上秦
大
諸
垣
外島
大柳
更

JR
阪急上牧駅
新幹線
R171
墓引き用
天人四甲子年
関門市修繕
濠池を相成
内池
ホンダ
上牧村
春日神社
外郭形成口
半月堡(馬出)
棧堡(総合)
国土地理院所蔵の図面
による復原図
上図の
「墓引き内」
の詳細図

本澄寺と朝倉・浅井について

本澄寺の四十三歳後厄年御自作の日蓮大聖人御霊像は、安置主として橘姓の薬師寺・冨松一門の牧兼重の名と元亀元年（一五七〇年）の年を伝えています。御霊像の底板には「若狭妙行寺」とあり、元亀元年は織田信長が若狭の武田氏を滅ぼした年です。本澄寺と縁がある京都市下京区・勝光寺の伝からして、「金牧丹波守」こそが天正元年（主君の朝倉義景滅亡の時）までの兼重その人の姿です。即ち、三好・松永の下克上の勢力と対峙し、永禄五年（松永久秀が京都の実権を握った時）あるいは永禄八年（松永久秀が将軍足利義輝を暗殺した時）を機に越前太守・朝倉義景に出仕した。朝倉家家臣団中の文芸に秀でた印牧（カナマキ）一族になぞらえ、出身地の上牧（カンマキ）と近似音である「金牧（カナマキ）丹波守」と自称し、元亀元年の若狭の武田氏の滅亡の年に御霊像を守り取った。

さて天正元年の朝倉・浅井の滅んだ時に、浅井の小谷城で「茶々・初・江」の三姉妹は助命されたが、浅井長男の万福丸は殺された。その中を生き延びたのが「天正元年誕生の次男の浅井万菊丸」で大分・熊本に子孫がある。朝倉においても、天正元年生れの朝倉義景の孫である「新伍（興相）」も実は全く同じ危機の境遇にあった。牧家系図に出生地も母も不詳として伏せられているのは、朝倉義景の娘を母として朝倉の地で生まれているからでしょう。「浅井万菊丸直政」と「（金）牧新伍（興相）」は朝倉・浅井の生き残りを賭けた同じ時に生まれ、風前の灯火の、草の葉の露の、男子の赤ん坊だったのです。後年に大分の地で、浅井直政が生き延びるために牧興相が特別な協力をしたのは全く同じ境遇のなせるわざです。

牧兼重の辞世の句は「露の身を　峯の嵐に誘われて　浮世の隙を今ぞ明けぬる」といい、此の句を踏まえて浅井直政は「露身居士」と号したのです。

この天正元年の主君（義父）朝倉義景の滅亡の後、「金牧丹波守・兼重」は名前を変えて、「牧兼重」として細川幽斎藤孝に同年中に出仕しました。出身地・上牧の一族は織田信長の配下として永禄十一年以降は既に大半が「牧」と名乗りを変えていました。そして細川家家臣として生き、最後は慶長四年に丹後峰山の城で亡くなりました。妻の朝倉義景の娘は朝倉家時代を偲び、かつ兼重の結局の生涯は「丹後」峰山にあったから、彼女の建立した勝光寺では開基檀越を『朝倉十六代吉景公孫女・金牧「丹後守」妻』と伝えているのです。

ところで勝光寺には、開基檀越の勝光院殿日勇尼の墓碑と並んで「寂遠院日通上人」の立派な墓碑が立っています。日通はやがて妙伝寺（総本山身延山直属の京都の本山）の十六世を経て身延山の三十世になり、その師の日勇は後水尾天皇・東福門院の帰依を受けています。本澄寺では十三世日寛の頃、本澄寺の日蓮大聖人御霊像に「東福門院御願の御事……度々の御祈誓あり皆速やかに成就（法華霊場記）」しているのです。（東福門院は生き残った浅井三姉妹の江の娘であり、元は朝倉・浅井一門が大切にしていた日蓮大聖人御霊像に子孫が再び帰依して御願が成就したのです。）そしてこの後本澄寺の十五世日迅・十六世日迫はそれぞれ本山妙伝寺の三十二世・三十世に入り、勝光寺十三世日進は本澄寺十七世に入ります。

本澄寺に属した牧一門の本家筋は大阪落城の時に父子討死して滅び、のち公家・烏丸家に仕えました。御霊像の宮殿の菊・桐の紋は東福門院により、桐の模様は豊臣の名残りです。